

戦姫絶唱シンフォギア Tears to Tiara

リユーイ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦姫絶唱シンフォギアとティアーズ・トゥ・ティアラのクロスオーバー作品です。

シンフォギアはAXZからでティアーズ・トゥ・ティアラは原作後の設定です。

魔王アロウンが原作後また眠りについてAXZの時代で目覚めるお話です。

# 目次

プロローグ	かげる陽だまり	1
第1話	魔王の復活	5
第3話	防人VS魔王 そして響の決断	16
第4話	賢者オガム	25

## プロローグ かげる陽だまり

エメラルドの書、曰く

黄金の時代があり

白銀の時代があり

青銅の時代があった。

竜の時代、巨人の時代、妖精の時代をへて

次は赤鉄の時代、それは人間の時代

そして今、長く続いた赤鉄の時代に嵐が迫っている。

すべてを押し流す大氾濫となるのか

あるいは新しい芽吹きをもたらす恵みとなるか

結末は天すら知りえなかった。

なぜならばそれは人間が自ずと決める事だから。



太陽が沈みかけた街角、小日向未来は寮への帰り道を足早に進んでいる。

彼女顔は楽しげではあったがどこか寂しさを感じさせるものだった。それも当然かもしれない今日は夏休みに入って最初の週末、今日是最愛の親友、立花響との楽しいデートの日だったのだから。

本来ならば寮のルームメイトである二人は一緒に帰路へとつくはずだった。しかし立花響の特殊な事情によって、未来は一人で帰ることになってしまった。

彼女はけっしてそのことで響を恨んではいなかったがやはり寂しいと感じる心はとでも大きかった。なぜならばその感情は響への愛情の裏返しなのだから。

そのような複雑な心境だったからだろうかいつも帰っている道と

さほど違わない道のはずなのに明らかに人通りが少なく、異様な雰囲気  
に包まれていることに未来は気づいてはいなかった。

未来がようやく彼女の後をつける怪しい人物たちとワゴン車に気  
づき逃げ出そうと、その自慢の健脚で駆けだそうとした時、怪しいワ  
ゴン車が彼女の前方に回り込む。

未来を捉えようとワゴン車の後部ドアが開き目だし帽を被った怪  
しい男たちが彼女に手を伸ばす。

反射的に後ろに逃げようとする未来だがすでに彼女の後ろをつけ  
ていた男たちが手を伸ばせば触れられるぐらいの位置まで来ている。

男たちは未来が振り返ると同時に彼女の口を押さえワゴン車の方  
へ引きずって行く。

未来は手足をバタつかせて抵抗するが男たちは特別に訓練された  
ものらしく難なく未来を車に乗せる。

そして未来を乗せたワゴン車はすぐに何もなかったようにその場  
を去っていった。



「師匠!! 未来が誘拐されたって、本当なんですか!!」

国連直轄の超常災害対策機動タスクフォース『S. O. N. G.』  
(Squad of Nexus Guardians)の本部機能  
をもつ潜水艦の指令室では、そこにいるには不釣り合いな制服姿の少  
女が、これまたその場に不釣り合いな薄いベージュのスラックスと真  
赤なワイシャツを着た男を問い詰めている。

少女は国連直轄の超常災害対策機動タスクフォース『S. O. N.  
G.』(Squad of Nexus Guardians)に所属  
するシンフォギア奏者にしてリディアン音楽院に通う女子高生でも

ある立花響である、男の方はS・O・N・Gの指令、風鳴弦十郎であつた。

今にも弦十郎に掴みかからんばかりの響を近くで様子を見守つていたS・O・N・Gの制服を着た女性、友里が響を止める。

「気持ちに分かるけど、少し落ち着いて、響さん はいあつたかいものどうぞ。」

やはり落ち着かない様子だったが、友里からあつたかい飲み物をもらい必死に心を落ち着かせようとして響は説明を待つ。

「実は昨夜から未来君と連絡が取れなくなり、位置特定用のGPS端末の位置を調べたのだが端末の位置はイギリスに向かつている飛行機の機内を示している、なので搭乗者名簿を調べたが彼女の名前はなく、空港の監視カメラ映像からも彼女が飛行機に乗った形跡がなかった。」

そこまで弦十郎が説明すると友里がその後を受け説明を続ける。

「ですので私たちは昨夜の小日向さんの足取りを追ってみました。ある所までは目撃情報や周辺の監視カメラに映っていたのですが、突然に足取りをたどれなくなってしまうのです。そしてそれまでの聞き込みで彼女をつける様にワゴン車が彼女を追っていたとの情報がありましたので誘拐と判断し、捜索を開始しています。」

「それじゃ未来はイギリスにさらわれたってことですか？」

弦十郎は今すぐにも飛び出していきそうな響に未来がイギリスにいないであろうことを伝える。

「いや、恐らく誘拐犯は訓練を受けた諜報員か軍人だ、GPSの信号は欺瞞情報だろう。」

未来が連れていかれているだろう場所の説明を弦十郎がしている時、指令室のドアが開き響と同じ制服を着た3人の少女が慌てて入ってきた。

「おっさん!! 未来がさらわれたって!」

「本当なんですか」

「デエース?」

そんな3人を源十郎は歓迎した。

「3人ともよく来てくれた。いま響君にそのことについて説明している所だ。」

3人はそれぞれ雪音クリス、月詠調、暁切歌、S・O・N・G・のシンフォギア奏者であり響や未来と同じリディアンの生徒である。

響とはクリスは月の落下事変、調と切歌はフロンティア事変で敵対関係であったこともあるが今は本気で響と未来を心配し駆けつけたのだった。

「それで未来君が連れて聞かれようとしている場所なのだがどうやらバルベルデ共和国のようだ。」

聞きなれない国名に響たちは戸惑うがクリスだけは苦虫を噛み潰したような表情だ。

「すでに翼とマリア君、二人の奏者が先行してイギリスからバルベルデに向かっている、我々もこれから空路にてバルベルデに向かうぞ!!」

「はい!!」

響たちは勢いよく返事をして準備し始める。

退室しようとしている響に弦十郎は「未来君は絶対に助け出すぞ。」と激励を送る。

「もちろんです。」

響は弦十郎の激励に力をもらったのか力強く頷いて指令室を出て行った、小日向未来を助けるために!!!

## 第1話 魔王の復活

小日向未来は車に連れ込まれ誘拐されていた。

車内で拘束された未来は睡眠薬を注射され眠りについてしまう。彼女が意識を取り戻したのは飛行機の中だった。

睡眠薬が抜けきっていないのか朦朧とする意識を何とか繋ぎ止め未来は目を開く。彼女の前には機内にも関わらずサングラスをかけている顎鬚をはやした男がいた。

その男は軍服の様な装いで高級そうな椅子に足を組み腰掛て自信に満ち溢れた表情で未来を見下ろしている。

未来はいつもよりはるかに重く感じる体を何とか起こす。

彼女が横たえられていたのはソファアーの様で、そこでようやく彼女はここが普通の旅客機ではなくプライベートジェットの様なものだと分かった。

「ここは何処なんですか？」

「ここはバルベルデの大統領のプライベートジェットの中だよ。お嬢さん。」

未来がサングラスの男に質問すると男は未来を馬鹿にしたように答える。

「バルベルデの大統領が私に何の用なんですか？ 私を如何するつもりなんですか？」

未来は挫けそうな心を響の事を思い出し何とか奮い立たせてサングラスの男を睨みつける。

「ハッハッハッ 大統領のプライベートジェットにのっているからと言って私は大統領ではないよ、短絡的思考なお嬢さんだ。」

男は愉快そうに笑う。

「だがあながち間違いとも言い切れない、なぜならばもうすぐそうなるからだ。だがバルベルデの大統領などと言う矮小な存在にではないがね。」

「そう、私は君を世界に破滅をもたらす魔王に生贄として捧げ、終わりにゆく世界で人類最後の支配者となるのだ。」



男は立ち上がり大仰な身振り手振りで未来に己の野望を聴かせる。未来はその男の芝居がかった動きから、男の自尊心を刺激してやり彼の妄想に合わせればもつと情報を聞き出せるし逃げる隙を見つけれられるかもしれないと考えて、未来は響のもとへ帰りたいたいという強い思いで己を鼓舞し、男が望んでいるのである。これから生贄に捧げられる非劇のヒロインを演じてみせた。

「どうして私を生贄に選んだんですか？」

「いいだろう、バルベルデまでまだ時間はたっぷりとある。教えてやろう。」

男は自分の優秀さを語りたくて仕方がないのでだろう、勿体ぶりながらも話し始める。

「貴様は知らんだろうがレセプターチルドレンと言う特殊な遺伝子構造をもつ者たちがアメリカのF I Sと言う組織に集められていた。理由は簡単だ、フィーネと呼ばれる異端技術をもつ者を復活させるためだ。F I Sが愚かなのはフィーネに騙され特殊な遺伝子構造をもつ者たちのすべてがフィーネの魂の受容体だと思ったことだ。実際は太古の魂を受容することができる器と言うだけだったのにな。」

「そのことを始めからわかっていた私は魔王復活の生贄にふさわしい魂を持つ者をF I Sのレセプターチルドレンの中から探したが不運にも見つからなかった。だが私は諦めずフィーネ関連の資料からリディアン音楽院にたどり着き、生贄に相応しい古き魂の欠片をもつた貴様を見つけたというわけだ。」

未来は男のリディアンを調べたという趣旨の発言に気づき、それならばすぐにS・O・N・Gの人達が気づいてくれるはずだと思いつき、ならば自分がすべきなのは助けが来るまで時間を稼ぐことだと思いつき、どんな手を使っても一秒でも長く生きようと決意したのだ。



小日向未来誘拐の一報をイギリスで聞き、他のS・O・N・G・のメンバーに先んじてバルベル共和国に到着したシンフォギア奏者の風鳴翼とマリア・カデンツァヴァ・イブ、そしてS・O・N・G・のエージェントにして現代を生きるNINJA、緒川慎二の三人の内の一、翼が空港で他の奏者たちを待っていると言着ゲートからはやる気持ちを押さえられないのか響が真っ先にやってきた。

「立花!!」

翼が響の名を呼ぶと、響は翼の姿をすぐ見つけたのか駆け寄ってくる。

「翼さん!! 未来が!!」

「話は聞いている。マリアと緒川さんが今、小日向が連れていかれそうな場所を調べている。」

翼が響に状況を伝えているとクリスを始め、日本にいた奏者たちと弦十郎と彼の部下のエージェント数名が合流した。

「このバカ!! 一人で先走るんじゃないやねえよ。」

「ごっごめん。クリスちゃん。」

クリスに叱られた響は素直に謝りみんなが集まるまで落ち着きなく待っていた。

日本からきた全員が飛行機から降り集まってしばらくするとマリアと緒川も戻ってきた。

「みなさんお待ちせしました。ですがその代わりに小日向さんの連れていかれた場所の目星をつけてきましたよ。」

緒川の報告に響だけでなく他の装者たちも沸き立つ。

そんな中、緒川の報告に沸く皆にマリアは「話は移動しながらしましょう。移動の足は確保して来たわよ。」と車のキーを見せながら移動を促す。

マリアの指示に従い、装者たちと弦十郎はマリアの運転する車に、他のエージェントたちは緒川の運転する車へと2台の車に分乗する。

移動を始めると早速、響がマリアに未来の居場所を聞いてくる。

「それでマリアさん、未来は何処に連れていかれたんですか？」

「落ち着きなさい。未来さんは此処から80kmぐらい離れた村の近くにある古代のカタコンベの遺跡に連れていかれたという情報が現地の諜報員から入ったわ。　どうやら軍の一部の部隊の独断の様なんだけど、そいつらが困ったことにどうやらアルカノイズを兵器として利用しているらしいわ。」

マリアが告げた魔法少女事変の時に自分たちを苦しめたアルカノイズが兵器利用されていると言う事に皆驚く。

「だから急ぎましょう。」

マリアは説明を終えるとアクセルを踏み込み速度を上げる。

「あの子にはフロンティア事変の時の償いも収監されていたときの差し入れのお礼もまだ何も出来ていないのだから。」

最後にマリアはそう呟き未来の無事を祈りひたすら目的地に向かい車を走らせた。



弦十郎はカタコンベの近くまで来ると皆に作戦を伝達した。その作戦とは翼、クリスがカタコンベに攻め入り相手に隙を作らせ、その間に未来を緒川と響が救出するという作戦でほかの者はカタコンベの外で待機し、5人の脱出を支援するという内容だった。

「ここまで来て助けにいけないなんて」

「LINKERがもつとあればデス。」

ここまで来て直接助けにいけない切歌と調が悔しそうにしているとマリアが自らも悔しいのを押さえて2人を「直接助けにいけないもできることはあるわ」と励まして共に未来救出に向かう4人を見送る。

マリアたちに見送られ出発した4人はすぐに響と緒川、翼とクリスに別れて響たちは静かに、翼たちは派手にカタコンベに侵入する。カタコンベの入口には警備替わりなのかアルカノイズが多数配置されていた。

　　それを翼とマリアは聖詠を奏でそれぞれ天羽々斬とイチイバルのシンフォギアを纏う。

　　「それじゃあ、ド派手なパーティーといきますか!!」

　　クリスは翼にそう言うとその多彩なアームドデバイスの中からシンフォギアの腰部アーマーからミサイルポッドを展開し、それらを一齐に発射するMEGA DEATH PARTYをぶちかます。

　　「やりすぎて遺跡を崩すんじゃないぞ。雪音」

　　「んっなこたあ、わあつてるよ。先輩!!」

　　クリスのミサイル攻撃のあと翼はクリスに建物を破壊しないよう注意するとギアから流れる伴奏に合わせ歌を唄いながら彼女のアームドギアである刀を構えアルカノイズに切り込んでいき、クリスも切り込んでいく翼に合わせて援護する。

　　翼の歌が戦場に轟くなか、翼とクリスは息の合った動きで次々にアルカノイズを消滅させてゆく。

　　その騒ぎを聞きつけたのか武装した兵士が出てくるがシンフォギア装者の前にはひとたまりもなく無力化される。

　　目につく限りのアルカノイズと兵士を倒した翼とクリスはカタコンベに入っていった。

　　「おくれるなよ 雪音!!」

　　「つたりめえだぜ、先輩!! あたしはパーティーには遅れたこたあねえ女だ!!」

　　クリスのその言葉に翼は呼び方がまだ先輩であることに気づきクリスに「翼と呼んでくれていいんだぞ。」と言った。

　　「なっなに藪から棒に頓狂なことを言ってやがる。」

　　「私はもう学校は卒業しているし先輩ではなく翼と呼んでいいんだぞ、と言っている。」

　　クリスは翼の突然のなまえをよんで発言になぜ今そんな話をする

のか意味が分からず、困惑する。

「今はそんな話してる場合じゃねえだろが!!」

「確かにそうだな。この話は小日向を取り戻してから彼女も交えて話し合おう。」

「なんでそこであの子が出てくんだよ。」

「雪音はなんのканのと言いつつ小日向には弱いからな。」

翼がそう言つてクリスに微笑む。

翼の微笑みにクリスは少し肩が軽くなった気がした。そのことでようやくクリスは少し気負いすぎて力が入っていたことに気づき、そして同時に翼がそんなクリスに少し力を抜かせようと道化を演じてくれたことに気づく。

クリスはその翼の気遣いに心があつたかくなつた。

「つつ翼なんてぜつてえ呼んでやらねえんだからな、先輩!!」

クリスは赤くなった顔を見られないように走る速度をあげた。

「今はそれで満足しておこう。」

速度を上げたクリスに続き翼も遺跡を進んでいった。

未来を救うために。



翼とクリスが陽動をかけている時、未来をさらつたものたちは遺跡の最奥、大広間で彼女に足かせをつけて逃げられないようにしてから復活の大釜を囲み魔王復活の儀式を行っていた。それ以外にも荘厳な棺とそれを見ているサングラスの男と彼を守っている兵士もいた。

「外が騒がしいようだが魔王が復活すれば全てが終わる。儀式を続ける。」

未来に魔王復活のたくらみを語っていたサングラスの男が大釜を囲んでいるローブの男たちに儀式を急かしている。

その様子を物陰から2人の人物が慎重に覗いていた。

その2人とは響と緒川であった。

2人はなんと翼とクリスが派手に陽動を仕掛けているわずかな隙に遺跡の最奥部までたどり着いていたのである。

「緒川さん、未来を助けに行きましょう。」

「待ってください、響さん。未来さんと敵の位置が近すぎます。それにここから出れば遮る物の何もないこの場所ではすぐ見つかってしまいます。」

すぐにでも未来を助けに飛び出していきそうな響を緒川が何とか制止しているとサングラスの男が未来に近寄り腰のホルスターから拳銃を抜き未来に突き付けた。

「出てこい!! 外の騒ぎが陽動であることぐらい分かり切っていることだ!! 出てこないならこの娘を撃つ。」

未来は銃を突きつけられて思わず心が萎れ、すくんでしまった。以前ノイズに襲われた時や高層タワーから落下しかけた時、共に命の危険があつたのに未来は今ほどすくんで動けなくなつたことはない。

それは銃と言う無機質な殺傷道具の向こう側、それを使う人間の異常性が感じられるからなのかもしれない。

未来は恐怖のあまり目をつむり祈る様に己の手を握っている。

その姿を目にした響は緒川が止める間もなく出て行ってしまった。

「未来!!」

響の声を聴いた未来は先ほどまでの恐怖が嘘のように消え、思わず捕らわれているのも銃を突きつけられているのも忘れ、響の所へ行こうとする。

「響!」

「おっと逃がすわけにはいかんな。」

サングラスの男は逃げようとする未来の髪を掴み地面に引き倒す。

「小娘一人でここまで来たわけではないだろう。残りの奴は何処だ!!」

サングラスの男が未来に銃を向けながらそう言うと思わず響は一瞬、緒川の方を向いてしまう。

「そこか。早く出てこい。」

緒川もいることを見破られては出て行かないわけにはいかず、姿を現した。

「装者の娘はギアをその場に置いてこちらへ来い。」

未来が人質に取られている状態では従うしかなく響はギアを地面に置くどゆつくりサングラスの男の方へと向かった。

男は響が十分に自分の方へ近づくと己の懐から小さなクリスタルの様なものを取り出して響とギアの間へと投げる。

そのクリスタルの様なものは地面にぶつかる割れて中から赤く発光する小さい球体が出てきて地面へと吸い込まれる。すると地面に発行する幾何学模様が現れ、その中からアルカノイズが生成された。

その所為でギアを纏わぬ響や未来では逃げるのが難しくなり、また緒川も迂闊に動けなくなった。

響が未来のもとに着くと二人は抱き合い互いに怪我がないことを喜んだが状況は好転したのではなくむしろ悪化してしまっており二人はサングラスの男を睨むことぐらいしかできなかつた。

丁度そのころ儀式が完了し、魔王の復活と言うには似合わぬ美しい光が遺跡にあふれた。



深淵の中、まどろみながら繰り返し、繰り返し、考えていた。

どれほどの時が流れたのかも定かでないぐらい。

そしてそれは、考えることに疲れ果て、深い眠りが意識をのみ込むまで続けられるのが常だった。

だが……今回は少し違っていた。

深い眠りが、ゆつくりと意識を奪っていく前に、アロウンは、懐か

しい顔ぶれが目の前で笑いかけているのに気づいた。

「お前たちを忘れたことなどないが夢の中とはいえこうして顔を合わせるのはいつぶりだろうか。」

アロウンはまどろみの中懐かしい者達を思い出し感慨にふける。夢の中の彼らは何も言わないがアロウンは目覚めが近いことを感じる。

アロウンは夢の中懐かしさに浸り、まるで楽園にいるような心地でいる中、不躰な欲望にまみれた下卑た言葉の塊で目覚めさせられた。

「時はきた!! 魔王よ!! この世に終焉をもたらす、血と灰と屍の王国をすべる王よ!! 今、目覚めて世界に破壊と殺戮をもたらすのだ!!」

アロウンはその以前にも聞いたようなセリフに辟易していたがそんなことはおくびにも出さず悠然と棺を出た。

その姿は在りし日のまま変わらず、新月の夜を表しているかのような漆黒の衣に灰色の髪、そして何より目を引くのはその瞳の色と同じ深紅の襟飾りだ、そのような姿のアロウンが腰にまるで血を固めて作ったかのような赤い剣をおびて出てきたのだからその場の者達は一様にひどく驚いている様だった。

そんな様子の皆をアロウンは一通り見回す

するとそこにはこれまた以前にもあったような光景、愚物と生贄の娘、そして生贄の娘を助けようとしている青年という光景があった。

「常名の者よ、地を這う虫けらよ……いと高き玉座にあった私を何故起こした? 古き闇を褥とし、温かな炎の夢を見ながら今しばらくはまどろんでおられたものを……」

あまりに定型的な光景にアロウンは状況を一瞬とかからず理解し、愚物……サングラスの男が良く踊るように男が好みそうな言葉を投げかけてやる。

「おおお 魔王よ。 私が貴様を目覚めさせたのだ。 古の盟約に従い私は生贄を用意した、古代王国の者の魂を受け継いでいるであろう器だ。 さあ魔王!! 終焉の世界の支配者の座を私にもたらしてくれ。」



男はまるで舞台役者の様に大げさな振る舞いで未来をアロウンに捧げようとする。

アロウンはその言葉を聞きゆつくりと響と未来、サングラスの男の傍まで歩く。

足かせをつけた未来はもとより未来を置いて行くなど考えもしい響はその場で未来をしつかり抱き寄せ動けずにいた。

だが彼女たちの瞳には諦めの感情はなく、逆に絶対にあきらめない意思のようなものを感じさせた。

アロウンはそれが心底愉快なのか少し口角をあげ微笑している。

アロウンが未来たちに手を伸ばさずとも触れられるほどの距離に来るとサングラスの男はいよいよクライマックスだとばかりに叫ぶ。

「さあ魔王よ!! 生贄を存分に引き裂き喰らうがよい。」

その声に反応するかのようにアロウンは腕を振り上げる。

それを見て響は先ほどより強く未来を庇い覆いかぶさるように彼女を抱きしめて目をつぶった。

振り下ろされた手が空を切る音が聞こえ肉を引き裂く嫌な音が響く。

だが一向に訪れぬ痛みにも響は未来に何かあったのではと目を開くが自分と同じく未来にも怪我は無い。

不思議に思い響はアロウンの方を見ると彼の腕は自分たちの方でなくサングラスの男の方に向かっていた。その彼の腕はまるで鋭利な刃物の様に男の胸に深々と突き刺さっていた。

「……なっ何故!?!」

「さてな、手が滑ったか……」

「だが大魔王の復活を彩るにはお前のような愚か者の血の方が相応しかろう。」

そう言うとアロウンは男の体から手お引き抜く。

「そんな理由でこの私を……」

男は胸からとめどなく血を流し倒れて動かなくなった。

「悲劇にはもう飽きたのだよ……本当にな。」

すでに息絶えた男に向かいアロウンは少し憐れむ様につぶやいた。

男が死に大団円に向かうかに思われたが統率者が失われたアルカノイズが無秩序に暴れ始め、まず初めに儀式をしていたローブを着た者達が塵へと変えられる。

やがてローブの者達を殺しつくしたアルカノイズの一体がアロウンたちの方へやってくる。

それを見たアロウンは腰に佩いた赤い剣、己の愛剣エドラムを抜く。

その刀身まで赤い剣、エドラムをアロウン・が振りあげると今度こそ自分たちの番なのかと響と未来は身をすくませる。しかしアロウンのエドラムが切り裂いたのは未来の足かせにつながる鎖だった。

「俺の後ろに隠れている。」

アロウンは響と未来に隠れるように言うと言と鼻の先まで迫っていたアルカノイズをエドラムで一刀のもと切り伏せる。

切り伏せられたアルカノイズは塵となり崩れ去ってしまったがそれを見た響、未来、緒川の三人は大いに驚いた。

何故ならば響たちの中ではノイズはシンフォギアでしかたおすことができないというのが共通の認識だったからである。

アロウンが一体アルカノイズを倒したからかアロウンたちと緒川に気づいたアルカノイズたちは二方向に別れて進攻する。

アロウンが迎え撃とうとエドラムを構えると、その時あまたの小型ミサイルとガトリング砲の砲弾が少女の声と共に飛んできた。

「どうやら、ラストダンスには間に合ったみたいだな。一切合切あたしが相手にしてやるぜっ!!」

イチイバルのシンフォギア装者、雪音クリスとアメノハバキリのシンフォギア装者、風鳴翼は皆が驚く中2人は大広間の入口で臨戦態勢到着していた。

### 第3話 防人VS魔王 そして響の決断

誘拐された未来を助けにきた響が誘拐犯と一緒に捕まり、そのうえ魔王も復活し、アルカノイズもそこら中に生み出された。

なのに制御していた奴は早々に魔王に殺される。

そんなカオスな状況を整理するためかのようにクリスと翼はさっそうと現れアルカノイズたちを倒していった。

二人と戦闘に参加しない緒川を見比べてアロウンは未来と響に話しかける。

「どうやらお前たちを助ける勇者はあの男ではなくあの戦士たちのよだな。」

未来たちはまだアロウンとどう接していいのか分からず沈黙を保っているが、そうこうしている内にクリスと翼がアルカノイズを倒し切り、緒川と合流し、アロウンたちへと近づいてきた。

「やい！ その黒ずくめのオッサン!! その二人に指一本でも触れてみる、ドタマに風穴開けてやるから、覚悟しな!!」

響の胸にギアのペンダントが無いことに気づくとクリスはそう啖呵を切つてボーガン型のアームドギアをアロウンに向ける。

「フツ、それは勘弁願いたいね。」

アロウンはおちやらかした感じでそう言うとな彼の後ろでお互いを守るように抱き合う未来と響の背を押しクリスたちのもとに戻るよう促す。

「さあ、行け。」

背を押された未来と響の歩みは最初、戸惑った様子でゆっくりだったがその歩みはだんだん早くなり、最後には解放された喜びに跳び上がらんばかり早くなって二人手をつないだままクリスと翼に抱きつき無事と再会を喜んだ。

しかし翼とクリスは喜んでばかりはいられなかった、なぜならばアロウンの存在があったからだ。

彼女たちはアロウンが未来や響をアルカノイズなどから守ったなどと言う事は知らない。

なので基本的にアロウンの印象は彼女が感じたものだけになるわけで、クリスからすればほぼ全身黒づくめの赤い剣を持った危なそうな男であるし、翼からすれば見た目と剣の事は置いておくとしても不敵な言動とは明らかに不釣り合いな尋常ならざる強い意志をその目に宿した油断のならない相手である。

2人が警戒を解かないのも当然だと言える。

しばし再開を喜ぶ響たちを言葉なく見るアロウンに言いようのない不快さを感じた翼はアロウンに彼女の刀型のアームドギアを向け強く詰問する。

「貴様は一体何者だ？ その眼光ただモノではあるまい。」

「何者か……か、今まで色々な呼ばれ方はしてきたが、そうだな、今の私はただのアロウンだ。」

アロウンは翼の氣勢も何のその、何か少し楽し気な雰囲気で翼たちを見回し、問いに返答した。

しかしこれに翼たちは納得できるはずもなくなおもアロウンを問い詰めるが肝心のアロウンがまるでまじめに答える様子がなく、糠に釘状態であった。

業を煮やした翼は質問の相手を大広間で起こったことの一部始終を見ていたであろう緒川に変える。

「緒川さん、彼は一体何ですか？」

「私にも詳しく事は……ただ未来さんを誘拐した人物曰く、世界に終焉をもたらす魔王と言っていました。彼を復活させた張本人が殺されてしまいましたので詳細は分かりかねますね。」

「世界に終焉ですか…… それだけ分かれば十分です。」  
緒川の説明を聞いた翼は知るべきことは知ったと自らの剣を構える。

幼い頃から守護する者として育てられてきた翼にはそれだけ分かれば刃を振るう理由には十分だったのだ。

翼はアメノハバキリから伴奏が流れてくると心から湧き出てくる思いを言葉と綴り歌となす。

序曲も終わらぬうちにアロウンとの距離をつめ、己のアームドギア

で袈裟斬りに斬りつける。

響が翼を制止する声が広間に響き渡るが翼は意に介さず次々と放つ斬撃はアロウンを容赦なく襲う。

しかしそのことごとくをアロウンは躲していく。

翼はその状態を何とか崩そうとアームドギアをもう一本取り出しアロウンの目を引くように大きく下から垂直に切り上げると同時に放り投げる。

「何を？」

アロウンがそれに気を取られる隙に翼はアロウンを横一文字に斬りつける。

「隙あり!!」

しかしそれすらアロウンは己の愛剣エドラムで受けとめててみせた。

「フツ どうやら隙は無かったようだな。」

不敵に笑うアロウンを無視し翼はそのままもう一步踏み出し、アロウンを後ろに吹き飛ばす様にそのまま薙ぎきった。

アロウンは間合いを開けるため込められた力に逆らわず、半ば自ら後ろに飛んだ。

だがアロウンが飛んだ先には先ほどまでなかった障害物ができていた。

「柱だと!!」

「否！ 剣だ!! 今度こそ、その隙つかせてもらおう！」

翼が投げた剣はアロウンの気を引くための物ではなかった、そう見せかけて本来の目的は逃げ場を塞ぐための物だったのだ。

翼はあえてアロウンの気を引くように剣を投げ、その隙を突くように見せかける事で本当の目的を見事隠しきった。

今度は翼がしてやったりと言う顔でアロウンを追い詰める。

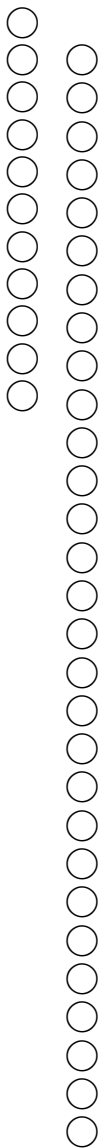
翼は振り上げたその剣を巨大化し大剣と成し必殺の斬撃を撃つ。

蒼ノ一閃

その斬撃は青い光の刃となりアロウンを襲う

アロウンは迎撃すべくエドラムを振るう。

そしてエドラムと蒼ノ一閃が邂逅した瞬間、強い衝撃があたりを縦横無尽に走りまわり、遺跡にたまった塵を舞い上げアロウンの姿を隠した。



翼が響の制止を聞かずアロウンと戦っている時、響は今にも戦いに割って入りそうな勢いで飛び出そうとしていた。

しかしそれを阻止する者がいた。

クリスだ。

彼女は片手で翼の援護をいつでもできる様に構えながらも、もう片方の手ではしっかりと響の腕を掴んでいた。

「このバカ!! 生身であの中に飛び込んで行く気かよ。」

クリスはちらつと未来の方を見て、

「こいつと会えた嬉しさで脳みそ溶かしてどっかにおいてきちまたつてのか?」

と強く響を止める。

だが響のお人よしと頑なさは筋金入りだった。

「でも!! あの人は私と未来を助けてくれた。きつと悪い人じゃない。」

響はもう決めてしまっている様だった。

「話し合えば、きつと手を取りあうことだつてできるはず!!」

クリスは響の強い思い、信念に精神的に押され気味だったが彼女にも譲れぬ一線がある。

「だからつて生身の奴を戦場にだせるか!!」

「クリスちゃん!!」

響は離してという意思を込めて彼女の名を呼び、腕を振りほどこうとするがクリスは絶対に離す気が無い様で、より一層強く響を掴む。

響とクリス二人の口論がだんだんヒートアップしていたその時、優しい声が二人に届く。

「二人とも落ち着いて、要は生身じゃなかったらいいんでしょう。」  
未来はガングニールのギアのペンダントを響に手渡す。

「はい、これ。」

響はギアを受け取るがまるで状況の理解が追いついていないように目を瞬かせる

「どうして未来がギアを?！」

未来は優しく微笑むと緒川の方を見る。

「緒川さんがね、翼さんとクリスがアルカノイズと戦っている時に素早く回収しておいてくれたの。」

響が緒川の顔を見ると彼は品の良い笑顔で一礼した。

これまであまり役に立たなかった、緒川の面目躍如と言う所だろう。

こういうそのつ無きは流石OTONAでNINJAな緒川だ。

「ありがとうございました、緒川さん。」

響は緒川に感謝すると未来とクリスの正面に立つ

「未来、クリスちゃん、心配かけてごめん。けどちゃんと解決する自信はあるから、行つてきます。」

「がんばって、響ならできると信じてるよ。」

「つたく、バカは死んでも治んねえんだっつけ、しゃねえから援護してやるよ。」

未来とクリスの反応は二人ともちがう感じだがそれでもどちらも響を大切に思う思いが伝わってくるようだった。

響は二人の声援を受け先ほどよりも自信を確かなものとして力強く聖詠を紡ぐ。

ギアは響の歌に反応しエネルギーへと解け、響の体に合わせ再構成される。

そのギアは性能のほとんどを両腕のガントレットと両足のグリーブのパワージャッキにつき込み遠距離装備はおろか近接武器すら持たない。

響のガングニールはまさに彼女の『誰かと手を繋ぎ合う事』を第一としたい彼女の願いを体現してくれている様だった。

響がギアを纏い翼とアロウンの戦いに割って入ろうとしたその時は丁度翼がアロウンを剣のもとに追い詰め、蒼ノ一閃を撃った後だった。

翼は追撃をかけるために土埃が舞い直単に視界が悪くなった中アロウンへと迫る。

翼がアームドギアを振りかぶるとアロウンもそれに気づきエドラムを構える。

翼が渾身の力をこめ振り下ろした剣はアロウンではなくいきなり飛び込んできた響に受け止められる。

だがそれは響の功績ではないとつきに響に気づいた翼が剣を止めたのだ。

「何のつもりだ!! 立花!!」

翼は響の突飛な行動を責めるが少し強引なところのある響きは翼の叱責をサラツと流し自らの主張を開陳する。

「すいません！ 翼さん。でも魔王さんは私や未来を軍人やアルカノイズから守ってくれたんです。世界に終焉をもたらすなんてきつと何かの間違いです。それにその証拠に私は切られてません。

翼さんが剣を止めてくれなければきつと私は切られてました。

同じように魔王さんも剣をとめてくれたんですよ。きつと話し合えば手を取りあう事も出来るはずですよ。」

響は翼に何も語らせぬ勢いで自分の主張を一息に語り切ると翼の反応を待った。

響には翼の次の言葉が出てくるまでの数秒がとても長く感じている様で少し心配そうに翼を見つめていた。

「わかった。この場は刀を収めよう。」

翼はアームドギアをしまったがアロウンに対する疑いは捨てきれない様子で響が言ったことも半信半疑だった。

響は翼がアームドギアを収めるのを見届けるとアロウンの方を向き彼の目を見つめ何の思惑もなくまっすぐに質問を投げかける。

「魔王さんは世界を滅ぼすんですか？」

「そんなことは考えていない。」



アロウンの答えを聞いた響は満面の笑みで翼へと振り返る。

「翼さん聞きました、魔王さん世界を滅ぼさないって!!」

「ああ、聞いていた。だがこのまま捨て置くと言うわけにはいかないぞ。」

翼のその言葉をどう受け取ったのか響はまたとんでもないことを言い始めた。

「わかってます。魔王さんは私が面倒見ます。」

あまりにも想定外の答えを聞いた翼はいつもの凜々しきはどこかに消え去ってしまいあたふたするばかりだった。

「面倒を見るって、あなた正気?」

「もちろんですよ、翼さん。魔王さん一人ぐらい私が養ってみせます。」

あまりに自信たっぷりにトンチンカンなことを言う響に翼はさらに混乱して、ついには自分が間違っているのかと考えそうになっている。

だがそんな翼に強力な助っ人が駆け付けた。

響のことならばもちろん小日向未来だ。

「ダメツタメツ、絶対にダメー」

いつも響を応援していた未来は何処へやら、絶対に反対と言う態度で響に詰め寄る。

「響!! 魔王は犬や猫じゃないのよ。もつとちゃんと考えて!!」

「へいき、へっちゃらだよ、犬も猫も魔王も大して変わらないよ。」

ちゃんと最後まで面倒見るから、お願い!! 未来。」

響も頑固なので諦めず認めてくれるよう未来を説得する。

そんな様子を見ていてクリスは思わず「いや、魔王と犬や猫はだいぶ違うだろが」とツツコミを入れるがそれを聞いていたのはもはや緒川ぐらいのもので他のものは響たちの言い合いに注目している。

頑なな響きに未来は、怒るのは効果が無いと悟ったのか次は切なげに語る作戦に出たようだ。

「響、私分かってたよ。響がダメな人を好きになるって、だって響のお父さんはあんな人だし、憧れてた翼さんはおかたづけのできない

人だし……」

思わぬところから飛び火してきた翼は「なんで私がこき下ろされているんだ」と不満を漏らしていたが未来は気にした様子もなく話をつづけた。

「だけどね、今回はもつとよく考えて……」

「未来。」

響は本気で心配している未来に抱きつきその言葉を遮る。

「大丈夫だよ。だって私が大好きな未来は全然ダメな人じゃないもん。だから何とかなる、何とかするよ。」

「響。」

そんな風に言われてしまえば未来はもう何もいいかえせなくなってしまう。

そして抱きしめあう2人は完全に自分たちだけの世界に入ってしまった。『そう言うことは家でやれ』と周りに思わせるぐらいあきれさせた。

そんな時、先ほどから沈黙を保っていたアロウンが響たちに語り掛ける。

「先ほどから聞いていれば俺をペットか何かの様に言った挙句に自分たちだけの世界に入りやがって、全く言いたいことは色々あるが、とりあえずそろそろ俺に対する態度を決めた方がいいんじゃないか、俺と戦うかそれとも、共に戦うかをな。」

響たちは「今はそんなこと、話してなかったよね」と言うような感じで凄いい氣勢で返される。

アロウンもその若い女たちのかشましい勢いに押され気味だが広間の入口を指さし必要性を説く。

「だがアレはお前たちの仲間と言うわけではあるまい。」

アロウンが指さす場所には何十体もの動く骸骨がいたそのほとんどがぼろぼろの鎧をまとい剣や槍で武装している。

そして頭蓋骨のかつて瞳があった場所には青く揺らめく火の玉の様な光が宿り、おどろおどろしさに拍車をかけている。

「骨が動いていますよ、翼さん!!」

今度は響が何が何だか分からないとばかりに翼に話しかけるが翼として動く骸骨が何かなど見当も好かない様子だった。

「新手のアルカノイズか。」

翼は分からないなりに推測するがそれはアロウンによってすぐに否定される。

「アルカノイズと言うのが何かわからないがあれはただの死者だ。

おそらく復活の大金の力が強すぎてこいつらも呼び起こされたのだろう。ここは墓地の様だしまだまだ出てくるぞ。」

「仕方ない、立花に小日向、魔王の事は後回しだ、今は共闘してこの場を切り抜ける。魔王もそれでいいな。」

翼の提案にアロウンはすぐに賛同する。

「俺はかまわんぞ。」

アロウンが共闘を了承すると翼はクリスと緒川にも声をかける。

「聞こえていたな、クリス、魔王とは共闘する。援護してやれ、

緒川さんは小日向の事を守ってください。」

翼はクリスと緒川に指示を出すとアロウンと響をちらつと確認すると「行くぞ！」と号令をかけアームドギアを構えて一番に切り込んでいった。

そしてアロウンと響も翼に続く。

## 第4話 賢者オガム

狭い遺跡の通路に戦の音が響きわたる。

翼を一番槍に響、アロウンと続き後ろでクリスが援護する。

つたない付け焼刃の連携だが骸骨の兵隊程度を相手にするには十分だった。

アロウンは翼たちと連携しつつも緒川や未来の方に骸骨たちが行かぬようにうまく立ち回りつつ近づいてくる骸骨どもを切り伏せていく。

そしてその間も装者たち3人のフォローにいつでも回れるように気を配っていたが装者たちには必要なかったようだ。

3人それぞれ戦いのスタイルは違えども実戦と訓練で磨かれてきた力は骸骨の兵士ごときを倒すのに何ら不安を感じさせない。

「このまま一気に駆け抜ける!!」

「云われるまでもない!」

「はいっ!!」

「オッサンこそとろくさ動いてあたしの邪魔になんじゃねえぞ。」

アロウンが号令をかけると装者たち三人はそれぞれに返事を返す。

一言が三倍になって帰ってくる、それは寝起きのアロウンには少々かましますぎる。

しかし同時にそれはアロウンに自らの目覚めを否応なくリアルに感じさせもした。

アロウン一行が通行を阻んでいた骸骨たちを一掃し遺跡の出口に向かい進んでいると翼たちや響たちが通ってきた道が落盤により塞がっていた。

「どうなってるんだよ! これ! あたし達は建物壊さねえように来たつてのに一体誰が崩しやがった。」

クリスのまるでここにいない誰かに怒鳴るような疑問にはアロウンが答えた。

「恐らく至る所にしたいが埋め込まれていたんだろう。骸骨どもが外に出てくるときに一緒に崩れたのだろう。」

「だとすれば壊して進んでも生き埋めになるだけと言う事か。」  
剣を強く握りしめ忌々しそうにつぶやく翼が呟く。

そんな時、一行の後ろから足音が聞こえてきた。

「何者だ!!」

翼たちが振り返るとそこには竜の装飾を施した杖を持つ体格の良い人物が立っていた。

その人物は最初青いローブのフードを目深にかぶっており誰だか分からなかったが、翼の声に従いフードを取った。

フードの下のその顔は頭髪だけでなく綺麗に整えられた口髭まで白髪かったがどこか逞しく感じられた。

響、クリス、未来は最初、そのがっしりとした体格とよどみを感じさせない歩みに老人だと思っていなかったのか驚いていたが翼は別の事に驚いた様子でその人物の名を呼んだ。

「オガム翁!!！ なぜこんなところに!?!」

「お久しぶりですな、翼殿、アロウン様もお変わりなく。」

オガムのその矍鑠とした姿にアロウンは懐かしくなりつい悪態をつく。

「お前の方こそジジイのくせにまだ死んでいなかったか、相変わらずしぶとい奴だ。」

気の置けない相手の様に接するアロウンとオガムに翼は何がどうなっているのか問い詰めようとしたが何やら後ろのアロウンや響がうるさい。

「ダメですよ！ 魔王さん、お爺さんに対して死んでなかったかなんて言っちゃ。」

「別に死ねと言っているでなし、これぐらいかまわんだろう。」

そんな事で痴話げんかの様な言い争いをする響たちに翼は苛立ちを感じずにはいられなかったのか声を荒げる。

「あなたたち少し静かにして、いま私がオガム翁から話を聞こうとしているの分らないの!」

アロウンは翼に怒鳴なれるなど何も堪えていないが響には効果絶大のようで叱られた子犬の様にシユンとしている。

そんな響を見て不憫に思ったのかオガムはとりなす様に話を進める。

「まあまあ、翼殿、今は此処から脱出することが一番。詳しい話はあとにいたしましょう。さあ、こちらへ。裏口へと通じる隠し通路が伸びている故。」

その言葉に一理あると感じた翼はオガムについて行こうとしたがこれまで黙って翼たちのやり取りを見ていたクリスが翼の腕を掴み己に引き寄せ耳打ちをする。

「おい、あの爺さんについて行って大丈夫なのかよ。こんなところに急にあんな古風な格好で現れて魔王とまで顔見知りって、どう考えてもうさん臭さが限界突破してんじやなねえか。」

「大丈夫だ、オガム翁は以前からの知り合いだ、信頼できる。ここは信じてついて行こう。」

そう言うと翼は先に言っているアロウンや響たちに続いてオガムを追っていった。

その後をクリスも「ああもう！　しゃねえなあ。」と言いながら何もわからないイライラを紛らわすように己の頭をかきながら行いく。

暫く一行がオガムの先導で歩いて行くと出口らしきものから外の月明かりが入ってきている光景が見えた。

だが皆が喜んだのもつかの間出口から外に出てみるとそこは遺跡の裏側で切立った崖だった。

「やい！　じじいこれは如何いうことだ!!　全面崖じゃねえか?」  
クリスは怒っていた。

オガムを信じてついてきて、出口が見つかったと喜んだのも束の間、外に出てみれば周りは崖、クリスの怒りも仕方のないことかもしれない。

自分たち装者は何とか崖を降りるなり何なりできるだろう、緒川も心配はいらないだろう、しかし生身の未来はどうだろう。

最初喜ばされた分怒りに転じた今落差が大きかったのだろう。だがそんなクリスをオガムは苦とも思わず年相応の好々爺然とし

た雰囲気だなだめすかす。

「ホッホッホッ 若い方はせっかちで行けませなあ、もうすぐ迎えが来るでしょうからしばしお待ちを。」

オガムがそう言うのと遠くからヘリのローター音が聞こえてくる。

その音は次第に大きくなり近づいてきているのが分かった。

やがてその機影が見え始めた頃、翼たちはそれが迎えなのだ確信を持つ。

なぜならばそのヘリにはS・O・N・Gのマークが書かれていたからだ。

ヘリが着陸するとすぐに扉があいた。

「みんな、早く。」

「ヘリに乗るデース。」

扉を開けたのは調と切歌だった。

すぐに響たちはヘリへと乗り込む。

全員乗り込んだことを確認すると翼は「全員乗った！ 出発してくれ!!」と声を張り上げた。

「OK！ 離陸するわよ、しっかり掴まっていなさい。」

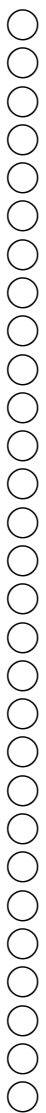
ヘリを運転していたのはマリアだった。

調と切歌が乗っていたので予想はしていた翼だがなぜこんなところにS・O・N・Gのヘリがあるのかと戸惑う。

「マリア、これは一体……なぜS・O・N・Gのヘリがあるんだ？」

「それは潜水艦本部がバルベルデまで来ていたからよ。それで指令がそこのお爺さんの要請でヘリを出すことを認めたのよ。けど今は撤収優先、詳しい話は本部に戻ってからにしましょう。」

マリアはさも簡単に言うがそれはとてつもなく大変な事態なのではないかと翼は思ったがマリアの言う事ももつともであるし、何より今は無事に未来が戻ってきたことを皆と喜ぶべきと考えそれ以上は何も言わなかった。



○○○○○○○○○○○○○○○○

本部潜水艦に着いたアロウン一行を迎えたのは指令風鳴弦十郎だった。

「お前たち、よく戻ったな!! 未来君も無事で何よりだ。早速で悪いんだが中で何があったのか報告を頼む。」

弦十郎が先導し全員が指令室に入ると緒川、未来そして装者たちが口頭で起きたことの説明をしてみた。

はじめは黙して聞いていた弦十郎だが流石に響がアロウンを引き取ると言う所では顔をしかめ唸る。

だがそれでも何も言わず最後まで報告を聞く一言。

「響君が魔王を引き取ると言うのは後でまた話し合うとして、今度はこちらで何があったのか説明しておこう、今後の行動にも関わってくるしな!」

そう言いと今度はS・O・N・Gの本部で何があったのかを話し始めた。

「潜水艦本部は我々が空路でバルベルデに向かう前、皆が準備のため艦を降りた後すぐに日本を出港していたんだがやはり我々のバルベルデ到着には間に合わなかった。しかし我々の到着から数時間遅れで到着してくれた本部も到着したのでへりを応援に出してもらったのだが、その時オガム翁とであってな。お前たちが崖の方から出てくるだろうから迎えに行くように頼まれたんでへりの一機をマリア君たちに任せ迎えに行ってもらって 俺は本部からいつでも応援部隊を出せる様に準備していたしだいなんだが、それは必要なかったようだな。」

弦十郎は一通り話し終えたが険しい顔を崩さない。

それはまだ言いにくい話が続くと言う事に他ならなかった。

「そして今回の事に関して国連から要望が来た。まあ要望と言うよりは取引を持ち掛けられたと言う方が正しいかもしれないが、今回の勝手な出動を不問とする代わりにバルベルデのアルカノイズなどの錬金兵装とそれに守られている兵器工場などの排除をするように言っ



てきた。装者たちには立て続けで申し訳ないがもう一働き頼む。」  
「そう言い頭を下げる弦十郎にはどことなく無念さと怒りが奥底にある様子だった。

そしてそれを聞き未来も自分がさらわれたせいで響たちを戦争が起こっているさなかに行かせてしまうことに罪悪感を覚えずにはいられなかった。

「ごめんなさい、私がさらわれたばかりにこんな事になってしまつて。」

「そんなことないよ!! 悪いのは未来をさらつた奴らですよね、翼さん」

すぐに響は未来の考えを否定し翼に同意を求める。

すると翼もそう思っていたのかすぐに同意した。

「もちろんだ。立花の言う通り小日向が気にする事ではない。」

そしてそこで話を切るためか弦十郎の方に向き直り作戦の内容を聞く。

「それで指令、作戦の内容はどのようなもののですか？」

「次の任務は化学兵器のプラントを制圧することだ。川を遡上して上流にあるプラントに進行する。」

弦十郎の説明は明瞭であったがひとつわからないことがあった、アロウンの事だ。

翼が皆を代表するようにそれを聞く。

「指令、私たちが任務に出ている間、魔王を如何するつもりですか？」

奴は高い戦闘能力を持っています、このままここに置いておくわけにもいかないと思いますが。」

先送りにしてはいたがこれも弦十郎の頭を悩ませる問題なのか彼は腕を組み思案している様子だった。

そんなの時また響から突拍子もない名案が出た。

「はい！ 私に名案があります！ この際魔王さんにもエージェントになってもらって任務を手伝ってもらってというのはどうでしょう？ そうすれば魔王さんを本部に置いておかなくて済みますし、戦力も増えるし、魔王さんお働き口も見つかる一石三鳥だと思います。」

響の案は一見問題をすべて解決しているようにも見えるが翼が気に入っている魔王を信じていいのかと言う最初の問題を何も解決していなかった。

故に翼は反対をしようと声を上げようとするが先にアロウンから否定の声が上がった。

「ちよつと待て、勝手に起こしておいてすぐ働けって、冗談じゃない、俺はもう少し休ませてもらうぞ。」

そんなぐうたら発言をしたアロウンの背中に悪寒が走った。

そしてアロウンの肩にポンと手が添えられる。

「魔王さん、響だけ働かせて自分は働か煮つもりじゃないですよ。ね。」

そうアロウンの肩に手を掛けたのは未来だ。

背の高いアロウンと未来ではその格好は不自然で滑稽に見えそうなものだが今は全然そのような雰囲気ではない。

それは未来がかなりお怒りだからだろう。

「そんなつもりないですよね。」

未来の指がアロウンの肩に食い込む。

これにはアロウンもたまらず許しを請う。

「わかった、わかったから、怖いから話してくれ。」

アロウンは何とか未来から逃れると弦十郎に問う。

「それでそっちの意見はどうなんだ。」

アロウンに話を振られた弦十郎はしばし考える様子を見せてから許可を出す。

「この際、戦力は多いに越したことはない、響くんの提案に乗ろう。」  
弦十郎が許可を出すと響は「よかったですね。魔王さん。」と喜び、  
当のアロウンはと言うとめんどくさそうに出撃の準備に指令室を出る。

それに続いてオガムや翼たちも指令室を出て行く。

彼らを見送った弦十郎に指令室のオペレーターの藤堯が声をかける。  
「よかったですか、あの魔王とかいうやつと一緒に出して？」

「お前たちにもこれから任務に出てもらうからな、魔王を置いておいて何かあれば手が足りなくなる可能性もある。それに魔王と言う男を見極める試金石にもなるだろう、今回は翼たちに頑張ってもらおう。」

藤堯の質問に答える弦十郎の目は何処か辛そうでもう彼に疑問を投げかけるものはいなくなつた。